
たそがれビレッジ

滝龍太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たそがれビレッジ

【Nコード】

N9582I

【作者名】

滝龍太郎

【あらすじ】

地名ブームが日本列島を駆け巡った時、栄村と光崎村が合併して栄光町と命名され、色々なグッズを世に出して町は繁栄した。しかし、ブームはいつまでも続かず、町所有の広大な土地に自動車産業の工場を誘致して町は救われたが、十五年経った今、不景気で工場を閉鎖する事になった。

その跡地にレジャーランドを目論むが・・・。

『大友鉦山の廃鉦により、従業員その家族、そして、下請けの会社やら関係する数は約三万人。その人たちの保障問題で……』

「大変な事だな」

カーラジオのニュースを聞いて、岩田忠兵衛は隣に座っている山岡町長に言った。

「まさにウチの町と同じだな」

山岡は、窓の外を見ながらボソリと言った。

ラジオで言っていた事と同じ出来事が、この片田舎の栄光町にも起きていた。

二十年前、地名ブームが日本列島を駆け巡った時、村起こしとして栄村と光崎村が合併し、栄光町と命名された。そして、栄光町の名前を世間に広くアピールし、栄光の名の入った色々なグッズを世に出した。

しかし、ブームはいつまでも続かず、もともと農業と林業が主な産業のためか、町は以前の町に戻り、衰退の一途を辿ることになった。

そこで、十五年前、今の山岡町長になった時、町所有の広大な土地に中堅どころの太平自動車の工場を誘致した。

太平自動車は、こんな辺鄙な所に工場を持って来ても採算が合わない、最初乗る気はなかった。そこで、栄光町は林業が盛んなため、材木には事欠かないので工場や宿舍までも町が作り、従業員の世話まで町が面倒をみるということで、太平自動車の誘致が決まったのである。

そして、農林業しかなかった町に新しい産業が生まれ、町は地

名のように光のごとく栄えて行つた。だが十五年たった今、列島に不景気の波が押し寄せ、太平自動車も例外でなく規模を縮小しなければならぬ状態に陥つたのである。

太平自動車は全国に五カ所の工場を持っているが、栄光町のように賃料の発生する工場を、まず先に閉鎖することになったのである。その閉鎖の知らせを聞いて、山岡町長は、栄光町産業振興会会長で町一番の実力者である岩田忠兵衛を伴い、今まさに太平自動車へ向かうところであつた。

助役の細川が、運転をしながらルームミラーで時々岩田の顔色を伺っている。

町としては、このまま閉鎖されてしまつては、町の経済どころか大勢の失業者が出てしまうので何とかとどまつて貰いたいのである。「大友鉦山の三万人に比べれば僅か二千人も知れないが、このちっぽけな町には願つてもない収入源なんだ」

山岡は吐き捨てるように、だれに言うともなく外の景色を見ながら言つた。

「まつたく、だれがこんな決定をしたんだ」

岩田は腕を組み、前方を凝視して言つた。

太平自動車の敷地は町の所有地が三分の二で、残りの三分の一は岩田の所有地である。岩田としても賃料が入つて来なくなれば痛手なのである。それに、産業振興会の会長という肩書と、だれもが認める町一番の実力者であり大地主なので、山岡は岩田に登場を願つたのである。

車は太平自動車の玄関に着き、三人は応接室に通された。そして河野工場長が現れ山岡町長の真向かいに座つた。

「昨日お話しした通り本社の決定事項でして、三月三十一日をもつてこの工場を閉鎖致します。永い間ありがとうございました」

河野が、山岡に深々と頭を下げた。

「そんなことを聞きに来たんじゃない。その後のことを聞きたいのだ」

岩田は、まるで自分の部下に言うように言った。

「それが、昨日のままなんです」

「何もが？」

岩田は机に両手を着いて身を乗り出した。

「河野さん。おたくの常務さんと十五年前に交わした約束はどうなるんです？」

山岡が口を出した。

「それは当時のことで、今は状況が変わったので納得して貰えと言われました」

「常務にか？」

岩田がからんだ。

「ええ。今は専務ですが」

「だったら尚更じゃないですか。それだけの地位の人が約束したことを、半分の期限で出て行くななんて……」

山岡の語尾が小さくなった。三十年の賃貸期間を半分の十五年で出て行かれたのでは町の計画が大幅に変わってしまう。そこで後釜に関連の企業を誘致して貰いたいと、昨日知らせを聞いた後すぐに山岡が提案したものだった。

「今の時勢、工場を新たに増やす企業など我々には思い当たりません。専務も努力はしてみるが約束はできぬとおっしゃってます。どうかそのところを分かって下さい」

河野が、山岡と岩田の顔を交互に見て、再び頭を下げた。

「うまく逃げたな」

岩田が言った。

「そう言われてもしかたがありません。私も突然の事でどうしたらいいか……。ただ、私共は本社なり他の工場へ行けばいいことなので心配はないのですが、現地採用の従業員が可哀想で……」

「その辺はどうするつもりで？」

「当然それなりの退職金はあるでしょうけど、その後の生活は、私にはどうすることもできません」

河野は一緒に働いて来た従業員を心配した。

「失業者が町に溢れる」

山岡も従業員を心配すると共に、町を心配した。

「従業員もそうだが、俺のところはどうなるんだ？ 賃料が入らなくなれば大変な痛手だ」

岩田が河野を睨んだ。

「それは分かりますが、この十五年、岩田さんも町も十分潤ったのと同じですか？」

岩田の言葉で、河野が開き直った言葉を口に出した。

「自分のところの山から切り出した材木で工場や宿舍を建て、その金を全部町から出させておいて……」

「なんだと！」

河野の言葉に岩田がカツとなった。

「おまえなんぞにそんなことを言われる筋合いはない！」

「待って下さい」

山岡が割って入った。

「確かにそういう形で工場や宿舍を作ったが、これは町の人の賛成の元でやったことなんです。それには、大地主の岩田さんの協力が必要ではなかったことなんです」

山岡は岩田のかたを持った。

「でも、十五年でかなりの賃料と税金が落ちたと思います」

河野は岩田を見ず、山岡を直視した。

「確かに河野さんの言う通り町は潤いました。しかし、これではまた元の貧しい町に戻ります。工場のために人口が増え、多くの人に使って貰いたいということで秋に体育館と運動場が完成します。町役場ももうじき新しくなり、市になっても対応できるものを作っています。このように、町と太平自動車とは持ちつ持たれつに発展して来たわけです。それをいきなり一方的に閉鎖することになると、多大な損害が町を襲うことになります」

山岡は、今の町の立場をもう一度認識して貰おうと話した。

「それは分かりますが、本社が決定したことで私にはどうすることもできません。町の状態は専務に話していますので良く分かっていると思います。しかし、専務としても役員会で決まった以上はどうすることもできないと思います。不景気をもろに被る産業ですからね」

河野は肩を落とした。

「町とは関係ないと言いたいのだな」

岩田が口を出した。

「そうです。これは一企業が生き残れるかどうかの問題なのです。町の繁栄とは関係ありません。私共は公務員じゃないのですから」

岩田の言葉で、河野は強い口調で言ってしまった。

ここで工場長の河野と押し問答していても埒があかないのは十分承知なのだが、町の危機に直面し、山岡は僅かな糸口でもあればそれを探りたかった。

賃貸契約書の条項では、賃貸期間は三十年。ただし、太平自動車が重大な危機を迎えて工場の運営が不可能となった時は、太平自動車は何時でも解約の申し入れを行うことができることになっていた。これは、弱者からの頼みだったので、強者の一方的な条項が受け入れられてしまったのである。

しかし、非公式ながら十五年前の契約の立ち会いの時、当時常務だった柏崎と町長になったばかりの山岡との間には、何があるかと三十年は借りるからと約束をしていた。これで山岡政権は、岩田と共に三十年は安泰だとたかをくくっていたのである。山岡、岩田ラインが町の行財政を握っているのだが、崩壊する姿が目に見えるようである。

「町長」

岩田が目をしよぼつかせて言った。

「柏崎に会いに行こう。奴はあの時、三十年は何であろうと借りると約束をしたんだから。今更そんなことは言っていないとは言わせない。なあ、そうだろ？」

岩田はアゴを出し、山岡に言った。

「その通り。私と堅い握手をした、あの約束事を忘れては困ると言
つてやります」

山岡が、岩田の言葉に力強く言った。

「まあ話して下さい。そこで新たな展開にでもなれば越したことは
ないですから」

河野が人ごとのように言った。

三日後、柏崎専務の時間が取れ、山岡と岩田は太平自動車の本社
へ行った。

結果は同じだった。十五年前の約束事を今更持ち出されても困る
と、逆に叱咤された。太平自動車の存続がかかっているのにそれど
ころではないと、後釜の話なども出ず山岡と岩田はがっかりして町
に帰って来た。

山岡と岩田が町長室に入るや否や、助役の細川が部屋に入って来
た。

「太平自動車の撤退を安川たちが聞き込んだらしいです」

「早いな」

山岡は、細川の言葉に何の反応もなく、静かに言った。

安川というのは、町議会での反主流派の親分で、山岡とは常に敵
対している人物である。

山岡は、柏崎との話し合いが決裂に終わったことを細川に話した。
「そうですか。後釜の話もだめですか・・・」

細川は肩を落とした。町の危機をだれよりも一番良く知っている
のは助役の細川である。繁栄の衰退などと言ってられる場合じゃな
いのだ。町自体が経営危機なのである。莫大な賃料と税金、従業員
が落とす消費、それらを当て込んで建築している体育館、運動場そ
して、新庁舎。全てがうまくいっていたのだが、何の産業のない町
だけに、一つの大企業に頼っていた緩慢な町の経営の大きな落とし
穴だったのである。

国からの地方交付税や補助金、県からの補助金と町債。自主財源が少なくても、普通はこれだけで成り立つのである。しかし、栄光町は太平自動車に全てをおんぶしてしまった分、それらの財源だけでは危機ラインを突破していた。それというのも、太平自動車を当て込んで、庁舎や体育館などを豪華にってしまったため、その分の補助金を削られてしまったのである。

「町長、どうする？」

岩田が山岡の顔を覗き込んだ。

「あと二カ月、この二カ月で後釜を探さなくては……」

山岡は、県知事に相談してみると言い、岩田にも後釜の候補をお願いした。

2

まもなくして、臨時町議会が招集された。当然、反主流派の安川たちの猛烈な質疑が続き、山岡たちはたじたじであった。現時点では後任候補を探すということしか答えようがなかった。県も関係機関に全力で当たってくれていると答えるが、それでも後釜が決まらなかった時はどうするのか、安川たちは山岡らを厳しく追及した。そんな議会を、町の人たちは不安な気持ちで見守っていた。

一方、農業、林業、商業、もろもろの組合でも会合が開かれていた。特に町一番の実力者率いる産業振興会では、それぞれの主だった人を集め議会とは違った話し合いが行われていた。

「議会では、ただどうするのかと町長を退任させるために騒いでいるが、わしらとしては即商売に結びつくだけに、議会の成り行きを黙って見ていてもしょうがないのだ」

岩田は、三十名余りの人たちに熱弁をふるった。

「今わしらができることは、親類、友人、知人、あらゆるつてを使つてでも、太平自動車の後釜を探すことなのじゃ」

かなりの痛手を食う岩田だけに、この危機を突破するのに必死で

ある。

「そんなことを言っただけで、そんなでっかい会社を知る者はおらんで」

栄光町商店会の会長が言った。それに同調する声があちこちから上がった。

「だから自分だけじゃなく、伯父とか伯母とか、だれか偉くなっている者がおるじゃろうが、そういう者がいないか？」

岩田が皆の顔を一瞥した。一同は頭を下げ、シーンとしてしまった。

「しゃあない奴ばかりだな」

岩田がぶつぶつと呟いた。

「そんなことを言っただけで、岩田さん。そりゃだれだって当たることはするでしょうけど、そんな簡単に、はいそれではということにはならんでしょ。しかもたった二カ月の間に」

農協の田畑が言った。田畑は農協の理事をしており、安川派の一人である。選挙の時は敵対しているが、産業振興会の中では同じ商工の人間として、同じ立場にいる。

「十五年前に太平自動車を誘致して町は栄えたかも知れないが、町の人はだれ一人変わってないのですよ。あれだけの従業員がいて、かなりの消費があると思っていたのに、それは最初だけですぐに隣町へ流れてしまった。この件についても町長と岩田さん……」

と言って、田畑は岩田を睨んで先を続けた。

「岩田さんたちは太平自動車で食わしてもらっているかも知れませんが、私たちは僅かなおこぼれで生活しているのですよ」

田畑の言葉に、そうだそうだと何人かが同調した。

「太平自動車に胡座をかき、我々の言うことに耳を貸さなかったわけが今来たんですよ。それを今更になって、どうしようかはないだろうに……」

田畑はどうしようもないといった表情で、最後は口ごもってしまった。

十五年前に太平自動車の誘致に成功した栄光町は、この上に胡座をかき、安川らの反主流派の言うことをまったく聞かなかった。

山岡は、町と岩田の繁栄に溺れ、次の策を考え出すことを忘れていた。町の人たちも、僅かながらではあるが以前よりはましな暮らしができていたので、山岡と岩田の言うことを聞いていた。

ところが、安川たちはそれでは満足できず、常に山岡と岩田を批判し続けて来た。太平自動車に代わる何かを作っておかなければ、必ずいつかは窮地に追い込まれると言っていた。二十年前の地名ブーム、それにあやかってもう一度何かを作り、それを町の産業として町独自の繁栄を築こうと提案していた。

「我々が言っていた地域の産業をたった二カ月でできるわけがない。岩田さん、あんたらの負けを我々に回さないでもらいたい」

田畑の言うことはもつともである。岩田は返す言葉がなく、田畑の視線を逸らした。

「田畑さんの言う通りだ！」

突然、岩田の腹心であるキムラストアーの代表である木村が大声を出した。

その声に、岩田がびつくりして木村を見た。

「岩田さん。私は常に町長とあんたの味方になって来たが、今度ばかりはそうはいかない。そりゃ、私も太らせてもらったかも知れませんが」

キムラストアーは、町で一番のスーパーである。太平自動車の従業員に多大な利用をしてもらい、かなりの売上を上げていた。

「店はどんどん大きくするわ人は増やすで、経費はどんどん膨れて来ている。そこへ来て太平自動車がなくなるとなれば、ウチはどうなるんですか、いっぺんで潰れてしまふ。店を大きくする時に岩田さんは言っていましたよね。大丈夫だ、太平自動車はなくなるらないからと……」

まさか木村が、それもこの席でこんなことを言うとは、岩田の心の中は複雑に乱れた。

「木村さん。それに田畑さん。私だつて町長だつてまさかこんなことになるとは夢にも思つてないことなんじゃ。太平自動車の常務と堅い約束をしてあつたのじゃが、国全体の不景気には勝てず縮小することになった。突然の申し出で対処のしようがなかったのじゃ」

岩田は、木村の寝返りで狼狽の色を隠せなかった。

岩田の言葉に、すかさず田畑が噛みついた。

「ここで岩田さんの言う後釜を探す件ですが、どう考えても二カ月では、たとえ有つたとしても無理なことだと思います。それよりも跡地をどうするか決めた方が良いと思いますが」

「そりやどついう事だ？」

岩田の目が、ギョロリと田畑を睨んだ。

「あの土地は町と岩田さんの土地です。町も岩田さんも貸した金でかなり潤つたでしょう」

田畑が岩田を見た。岩田はそれがどうしたという顔で何か言いたそうであつたが、構うことなしに田畑は続けた。

「ですから・・・、今一番の問題は後釜を探すということ、それには同じ条件で後釜を探すのは大変な事です。そこで、土地をただで貸してやればいいのです」

岩田が、椅子から立ち上がつて田畑に文句をつけた。

「何を寝ぼけたこと言つてんだ！ 俺の土地をただで貸せつて？」

「まあ、待つて下さい」

田畑が岩田の言葉を制した。

「町はともかくとして。岩田さん、あんたはもう十分儲かつたですよ。今度はそれを我々に還元して下さいよ」

「何をだよ。何を還元するんだ！ 俺の土地でいくら儲けようと勝手だろ。それをお前なんか指図される覚えはないわい」

岩田は頭に血が上つた。

「岩田さん。町の人々が皆困つてゐるんだ。もう少し町の人のことを考えてくれないでしょう」

田畑が、岩田をなだめるように言った。

「いいですか、私の言うことをよく聞いて下さい。皆さんも聞いて下さい」

田畑が、皆の顔を一瞥した。

「何度も言いますが、後釜を探すなんてことはすぐには不可能な話です。この不景気に工場を新設する企業なんて、それこそ砂丘で米粒を探すようなものです。まして高い賃料を払ってだれが来ますか？」

田畑はここで一呼吸置き、岩田の顔をチラッと見て話を続けた。

「そこで、こちらから大々的に広告をするのです。広い敷地に工場は建っているし、宿舎も完備している。そして最大のメリットは賃料がゼロと言うことです」

会場がざわついた。

岩田が椅子から立ち上がり、田畑に指を差した。

「まあ、待って下さい」

田畑は岩田を制して、話を続けた。

「賃料がただというのはただ同然ということです。当然岩田さんには固定資産税やら何かがかかるわけですから、そのかかる分だけで貸すのです。そして、人が集まればそれだけ町に金が落ちるのです。今度は隣町に行かせないで、この町独自の繁華街を作れば従業員の人たちは我々に商売をさせてくれるのです」

聞いていた三十名余りの人たちは一様に感心していた。ただ、岩田だけはブスツとしている。

「どうです。ただ同然なら名乗り出て来る企業はあると思いますが、いかがですか？」

田畑が皆に向かって言った。

「その通りだ。不景気なんだから余計に有ると思う」

先程の木村が、田畑の案に賛成した。

山岡派も安川派もなく、皆が町のため、自分たちのため、田畑の提案に賛同した。

一人面白くないのは岩田だけである。自分の腹心に裏切られ、そ

の上土地をただ同然で貸さなければならぬとは、険しい顔が更に険しくなった。

「田畑さん」

岩田が田畑を睨んだ。

「あんたがわしの立場だったらどうするかね。土地をただ同然で貸すかね？」

「ええ、そうします。十五年も儲けさせてもらったのですから、今度は町の皆のために使ってもらいます」

田畑は何の躊躇もなく言った。

「ま、それは現に自分の土地じゃないからな。好きなことを言える。・・・」

岩田が椅子から立ち上がり、皆に向かって言った。

「いいか、わしの土地はわしがどうするか決めることじゃ。お前らにとやかく言われたくない！ 分かったか！」

岩田は語尾を荒くした。

岩田自身の土地であり、この産業振興会の会長でもあり、田畑の言いなりになるものかと、勝手な提案を一喝して退けた。

だが、出席者の大半は田畑の提案に気持が傾いている。それは他人の土地をただ同然で貸すという勝手な提案であつたが、町の人たちは皆、町長と岩田が結託して陰で儲けているのを知っているのである。

現に太平自動車がいなくなれば、何も町長や岩田に遠慮する必要はないのである。そこにこの田畑の提案。当然、皆賛成するのは当たり前であつた。

3

町議会では結論が思つように出ず、そこで町の経済を預かっている産業振興会の面々が議会に加わつた。

山岡町長、岩田産業振興会会長の主流派に対して、安川、田畑

ラインの反主流派が真つ向からぶつかった。

産業振興会は岩田派が独占状態であったが、この出来事と先の会合で、完全に逆転してしまった。

山岡、岩田におんぶして来た町の人たちは、背に腹は変えられぬと、今回の件で一氣に爆発したのである。

その結果、山岡、岩田は安川に押されっぱなしで、ついには田畑の提案を受け入れ、議論することになった。

この案を早急にまとめ、後釜を募集しなければならないのである。「町長、何か手立てはないのか！」

初日の議会が終わり、山岡派の面々を前に岩田が町長室で怒鳴った。

「わしの土地はわしの土地だ。勝手にさはせぬ。あの青二才め……。石渡、そうだろう。わしの土地を勝手にどうにかできるわけないだろう？」

山岡派はかなり小人数になってしまった。残っているのは、それこそ山岡や岩田の特別な恩恵に預かっている人物だけである。その中の一人である弁護士石渡に岩田が聞いた。

「当然、個人の所有物ですので、だれが何と言おうと権利は岩田さんのものですから。岩田さんが首を縦に振らない限り、だれもどうすることもできません」

石渡はずる賢そうな顔で言った。

「実は、岩田さん……。」

山岡町長が心配そうに言った。

「町の人たちの心配以上に、もっと深刻な問題があるのです」

山岡の言葉に、岩田のみならず他の議員や岩田の腹心の面々までが、一瞬山岡に視線を移した。

「ご存じのように、町は太平自動車を頼ってそれに伴う他の事業に手を出しています。また、町の人や従業員のために色々な施設を作っています。そして、いずれは市にと。それもこれも太平自動車のお陰なのです」

「そんなの分かってる。それより何が言いたいのか早く言え！」

岩田は山岡の遠回しな説明に苛立って来た。

「町が危ないのです」

助役の細川が思い余って言った。

「なに！」

岩田が恐ろしい顔で細川を見たあと、山岡を睨んだ。

「そうなんです。国や県の補助やらで我々みたいな小さな町は存続して行くのですが、太平自動車という多額の納税と消費で町は有頂天になり、他の発展を考えなかった……」

山岡が、自派に対して初めて弱音を吐いた。

太平自動車の撤退で税金が極端に減少することは明らかである。

その時、この町の経営は単なる赤字自治体という名目だけではなく、町の破綻を意味するのである。

町の破綻ということをし、山岡は初めて口に出した。

「何てことだ」

岩田は頭を抱えてしまった。

「こんなことを安川たちが知ったら大変だ！」

石渡が叫んだ。

町民の危機どころか、町自体が危機と知れば、当然安川たちは田畑の案を推し進めるだろう。それを阻止するには今の山岡派としては立ち向かう力はない。そして、山岡町長はリコールされ、町を追われるだろう。岩田の土地もただ同然で貸さざるを得なくなる。

「いいですか、町長」

石渡が何やら考えた後、山岡に言った。

「今はまだ太平自動車がいる。そして町長も現役なのです」

石渡はそう言って山岡と岩田を見て、他の面々の顔も見渡した。

「私にちよつと考えがあります。早急にまとめますので……」

石渡は、また皆の顔を見た。この中にも山岡派を脱退して安川派に鞍替えしたいと思っている人物は、いくらかいる。石渡はそんなことは当然分かっているの、自分の考えを後延ばしにした。山岡、

岩田派の確固たる人物を把握して、秘密の会議を開こうと考えていた。

石渡は、太平自動車がいて山岡が町長であることを強調したのには、当然両方とも近いうちなくなることを知っているわけで、安川派に行きたい人間は早く行けと暗に仄めかしたのである。

町長室での話し合いは、石渡の提案で中途半端な終わり方をした。岩田は、石渡の言うことなので何か良い案があるのだろうと、それ以上は口を出さなかった。

数日後、山岡、岩田派に残った人物を更に厳選して、石渡の音頭の元、岩田家に集まった。

列席者は、町長の山岡、助役の細川、山岡派で県会議員の金村、産業振興会の会長の岩田、岩田の娘婿で栄光町にある信用金庫の支店長である倉本、そして、弁護士の子の石渡の六名である。

「すでに、我々の味方はこの六名だけと考えた方が良いと思います」
岩田家の応接間で、石渡が小声で言った。

何もこの場で、小声で言う必要はないが、自然と後ろめたい態度が出てしまっている。

「安川派は確実に我々を弾圧して来るでしょう。そして田畑の案を受け入れ、町の人を味方につけるはずです。その時、我々の存在はなくなるでしょう」

山岡はすでに観念している。細川も金村も倉本も黙ったままだ。

岩田は栄光町一の実力者であり、大地主として今後の行方は一番気になる場所である。

「そこで、我々も田畑の案に賛成するのです」

岩田が立ち上がろうとしたが、石渡がまあまあと制した。

「ただし、それは表向きだけです。今はそうしておいて時間を稼がなければならぬのです。リコールでもされたら大変なことになりますから……」

石渡は自信たっぷりに言った。

「そこで、倉本さん。信用金庫から五十億の金を岩田さんに融資し

て下さい」

「えっ！」

倉本がびっくりした。

岩田もびっくりしてあつけにとられている。

「そんな大金、無理に決まってる」

倉本が石渡を見た。

「だれのお陰で信用金庫が出店でき、しかも支店長になれたか、分かっていますよね」

石渡が倉本を見下した。

「ええ、全て岩田さんのお陰です」

倉本はそう言っ下を向いてしまった。

岩田は五十億と聞いてびっくりしていたが、石渡の言うことなので黙って聞いていた。

「岩田さんのお願いだと言えば、本部は腰を上げるでしょう」

「そりや岩田さんの名前を出せば、どんなことでも相談に乗ってくれるでしょうけど、五十億という金はそう簡単には……」

倉本が岩田の顔を見た。

岩田は素知らぬ顔でただ黙って聞いている。

そして、石渡の眼光が鋭く倉本に刺さった。

「倉本さん。これはあなたにとっても非常に大事なことです。この小さな支店で五十億もの商いなんて、一生に一度あるかないかのことですよ」

「そりや大変うれしいことですが……。その、五十億の借財は？」

倉本が、石渡に恐る恐る聞いた。

「太平自動車の敷地です」

石渡の言葉に、皆一斉に石渡を見た。

「ご存じのように、太平自動車の三分の一は岩田さんの土地で、三分の二は町の土地です。その町の土地を岩田さんが買うのです」

皆あつけにとられた顔で、更に石渡を見つめた。

岩田が何か言おうとしたが、石渡が止めた。

「議会で可決されたということにして書類を作り、それを持って倉本さんは本部に行くのです。その書類は、町長と助役がここにいるのですから簡単ですよね」

石渡が山岡と細川の顔を見た。

二人は黙ったまま、顔を痙攣させていた。

「後釜が思うように行かず、町の危機を脱するためにやむなく売却するということで、岩田さんがその購入者になり、倉本さんの信用金庫にお願いに来たということにしますのです」

石渡は一呼吸して、皆の顔を見た。

「もちろん、全て内密に素早くやるのです。そのために、田畑の案に賛成して時間を稼ぐのです」

「その金で町を救うのですね」

県会議員の金村が口を開いた。

「いや」

石渡は首を横に振った。

「じゃその金は？」

細川が聞いて来た。

「当然、町の土地を売るので、町に入ります……」

石渡が、山岡と細川の顔を鋭い視線で睨んだ。

「あなたたちは公文書偽造並びに行使、そして横領」

「横領？」

細川が聞いた。

山岡は、先程から薄々事態が読み込めたのか、すっかりと観念した顔をしている。

「細川さん。三億という金は使いでがありますよ」

石渡のこの言葉で、細川もようやく事態を把握した。そして、石渡は自分の構想を熱く語った。

まず、倉本の信用金庫から岩田名義で五十億円を借り、町所有の太平自動車の敷地を三十億円で岩田が購入する。三十億円という価

格は妥当な線である。これで太平自動車の敷地は全て岩田のものになる。町は三十億円という金で商圈を整え、自主財源の構築をする。そして、広大な太平自動車の跡地は一大レジャーゾーンに様変わりし、そこから町の財源を確保できるようになる。アメリカのある企業が遊園地を主体としたレジャーゾーンを作りたいと、太平自動車の跡地であれば契約したいと、自分の仲間を通じて確約が取れている。保証金が五十億円で五十年償却。借地料は太平自動車に貸していた時の三倍。

岩田としては、その保証金で倉本の信用金庫に借金を返済し、ただ同然で貸さざるを得なかった土地が以前の三倍で貸せて、自分の敷地もただで三倍もの広さになるわけである。

そして、県会議員の金村はそのレジャー産業の利権を貰えばいいし、山岡、細川は危険負担で三億円の金を貰える。倉本は岩田の資産が増えると同時に役員の椅子が見えて来る。自分は、残りの十四億円をこれからの経費として貰う。このように皆が潤うのである。

石渡の熱っぽい説明に、皆引き込まれていった。

4

安川派に賛同した山岡と岩田は、その隙をみて石渡の指示の元、金村、倉本を動かした。

田畑の案を議会で賛成多数で可決させ、山岡は自ら太平自動車跡地の後釜対策本部の本部長となった。

山岡と安川は、連日関係官庁と企業を回り、後釜候補を探した。その留守を細川が守り、企てを悟られぬよう細心の配慮をした。「考えてみれば石渡弁護士の方策はちょっとおかしいな」

金村が不審な顔で倉本に言った。

金村はレジャー産業に関する利権の目論みを調査する一方、アメリカのレジャー産業がこんな片田舎に、デイズニランドみたいなものを建設するのか疑問に思い、倉本を自宅に呼んだ。

「そのレジャー産業のことだが……」

金村は、わざと間をおいて倉本に言った。

倉本はブランドをゆつくりと口にもって行つた。

「町の土地を売却して岩田さんの所有にし、一括してその企業に貸すわけだが……」

金村は、倉本の顔の表情を見ながら喋っている。

「何も町の所有のままでも貸せるわけだよ。太平自動車の後釜にもつと条件の良いレジャーランドに貸すわけだから……」

金村が喋るごとに、倉本の表情が冴えなくなつて行く。

「山岡さんや細川さんを危険な目に遭わさなくても、そのまま貸すことができるのだから、それが一番いいことじゃないのかね」

「それは……」

倉本は青白い顔をして、ようやく口を開いた。

「貸主が個人の所有でなくてはいけないのかも知れませんが、それとも一人でなくてはいけないのかも……」

倉本は、石渡の正当性を主張した。

「確かに複数になると後で色々と問題が起きるかも知れんが、相手は町なんだぞ。自治体との契約なんだからこんな確かなことはないだろう」

金村はブランドをぐいとあおつた。

倉本は、それには何の反論もせず、金村の顔を見ている。

「君が岩田さんの名義で借りる五十億から石渡は十四億を懐に入れる。その後五十億の保証金を貰い岩田さんは借金を返済する。そして、私は膨大な利権を貰い、君は一躍役員だ。山岡さんと細川さんは三億づつ貰つて追放されるだろう。しかしだ。全てのことはその後のことなんだ。アメリカの企業とあの約束の元に契約できるといふ保証は何もない。現にそのことについては何も教えてくれないだろう？ 極秘だ、極秘だと言って隠している。変だと思わないか？ そこで、アメリカの友人にそれとなく当たってもらったのだが、それらしい動きは何も出て来なかった」

金村が倉本の顔を見た。

「もし、これが別の策略があつて、岩田さんと組んで違うことをやるうとしてゐるのなら、君の耳には入つてゐるだらうと思つて来てもらつたのだが……」

金村の目が鋭く刺し、倉本の本心を探った。

「まさか。石渡さんが岩田さんと組んで、そんな出鱈目なことを我々に言うわけがないでしょう。まして、石渡さんは自分だけ儲けて後は知らないなんてことはするはずがないです」

倉本がきつぱりと言った。

当然石渡については100%信用しているのでそんなことは考えてもみなかった。しかし、金村にそう言われてみるといくらか自信は揺らいだが、自分を納得する意味でもあつたので、金村にきつぱりと言つたのである。

「じゃ、岩田さんは聞いてゐるわけだな？」

倉本が自信をもつて言つたので金村が厭味を言つた。

「それは分かりません。でも一番の当事者ですから、いくらかは知つてるかも知れません」

「その程度で君は五十億もの金を貸すのかね？ 町の土地をすぐに買い戻しても三十億だ。岩田さんは何もなく二十億の借金を抱えるんだぞ」

金村の強い口調に倉本は一瞬ひるんだが、心の中でそんなことがあるはずはないと考え、

「考えすぎです」

と、言つて倉本は唇をキツと結んだ。

「君がそこまで言うのならそうかも知れん。ま、どちらにしろ俺は何の怪我もないから構わないけどね……」

金村は、倉本に含み笑いをした。

一方、山岡、安川の後釜探しは難航していた。条件はかなり良いのだが、それだけのものを移動するとなると大変な金がかかるのである。

かといつて、何十人かの規模のものでは潤わないのである。ある一定規模以上の人員が来てくれなければ、町は恩恵に預かれないのである。町の今の現状ではそれらの移動費までは念出できない。あと一カ月、事態の深刻さはひしひしと伝わって来ている。

5

倉本の信用金庫では、岩田に貸す五十億円の融資が決定し、あとは日取りを決めて実行するだけであった。

倉本は、金村から聞いたことが頭の中から離れられず、幾度となく、義理の父である岩田からレジャー企業の名前だけでも聞こうとした。が、元来気の弱い倉本は、岩田の前に行く去何も喋れず、まして意見など言えたものではなかった。

「倉本です。五十億の融資が降りました」

「そうか、ごくろう」

岩田はそれだけ聞くと電話を切ろうとした。

「あの……、アメリカの企業との契約は、いつ……、やるのですか？」

倉本が恐る恐る聞いた。

「そんなことはお前が知らんでもいい！」

一喝されて電話は切られた。支店長とあるう者が情けないとは思ったが、岩田のお陰で現在の自分があるので倉本は何も言えたものではなかった。

倉本は、地元の高校を卒業してすぐに今の信用金庫に勤めた。真面目な倉本は、こつこつと人並み以上に仕事をこなしていたが、後から入って来た大卒組にどんどん抜かれて行った。

そんな惨めな経験をしていても、常に前を向いて一生懸命に働いていた。そんな姿を見ていた女子行員がいた。それが岩田の娘、良子であった。いつしか二人は結ばれ、岩田の力で倉本は出世街道を歩くようになった。

そして、この小さな町に信用金庫を出店させ、倉本を支店長に迎えたのである。全ては岩田の力があつたからではのことである。そこへ今度は岩田との大きな取り引き。倉本は役員へ一步一步近づいているのを肌で感じ取っていた。

岩田はもう少しましな婿を貰つてほしかったと嘆いているが、娘が選んだものはしかたがないと、倉本を育てているのである。そして、信用金庫を最大限に利用するため、倉本を手先にしたのである。それに、石渡という悪知恵の発達している弁護士を味方につけ、行政には山岡という家来を町長に据え、町全体を意のままに操っているのである。

そんな岩田の野望を阻もうと、安川が反主流派の旗を上げ岩田に挑みかかつて来たのである。その安川を欺くために、山岡は同調したと見せかけ安川と行動を共にしているが、安川とて簡単に同調して来た山岡を完全に信用してはいなかった。

山岡と細川の動き、岩田、倉本の動きなど、安川派は常に睨んでいるのは当然のことであつた。

そんな折、岩田が細川を、極秘に信用金庫の本部に呼んだ。さいわい、栄光町と信用金庫の本部とはかなり離れていたもので、だれに見つかることなく会うことができた。

細川は初めて信用金庫の本部に足を踏み入れた。応接室へ通され、岩田が信用金庫の役員たちをあごで使っているのを見て、細川は自分は正しいことをやっているのだと、改めて自分に言いきかせた。

岩田が真ん中に座り、右隣に石渡と信用金庫の役員が二名、左側に司法書士と細川が座り、その横に融資の課長が座った。倉本の姿はなかった。

細川は持つて来た書類を司法書士に渡した。司法書士は細かくチェックをし、融資の課長に「間違いありません」と伝えた。課長は役員に頭を下げ、応接室を出て行った。

その間、細川は世間一般的な話で場を繕った。

しばらくして、課長が何枚かの書類を持って入って来た。それを役員に渡した。

「それでは、細川さん、今あなたの町の口座に入れましたので……」

役員はそう言って細川に振り込みの伝票を渡した。

伝票には、栄光町出納係宛に三十億円の金額が書かれていた。

栄光町出納係の口座は正規のものではなく、山岡が指図して倉本が新たに作ったものである。

細川はそつと伝票を仕舞い、領収書を出して岩田の顔を見た。

岩田はするどい眼差しで細川を見返しただけで黙っていた。隣の石渡も同じく黙って眉一つ動かさず、細川の顔を見た。

そんな緊張の中、役員は何もなかったかのように何枚かの書類を岩田に渡し頭を下げた。

栄光町所有の太平自動車跡地の売買が終わったのである。

山岡、細川の作成した偽議事録を信用金庫に差し出し、のちに本日を取り引きになったわけである。

6

田畑の案で一致した議会は、山岡町長と反主流派の親分である安川との企業誘致の行脚は続いていたが、どこも具体的な話が出て来なかった。

「岩田さんを抱き込んで、何かせなしょうがないな」

安川が町長室で山岡に嘆いた。

「成功すると思ったのですけどね……」

田畑も疲れた色を隠せずにいた。

「世の中よっぽど景気が悪いのですよ。田畑さんのせいじゃない」

山岡が田畑のかたを持って言った。

「皆、私が悪いのです。太平自動車だけに肩入れをしてしまった私が悪いのです。このまま、後釜が見つからず空き家のままになって

しまえば、町は破綻します……」

山岡は、そう言っただけの顔を見た。

皆といっても安川、田畑、細川の三名だが。

「いっそのこと、売ってしまっただけ？」

細川が突拍子もないことを言った。それを聞いた安川と田畑はびつくりした。

「売れるわけがないだろう。だいいち、だれが買っただけ？」

安川が細川の案を鼻で笑った。

「そりゃ分かりませんよ。あれだけまとまった土地は中々ありませんからね」

細川は必死だった。

「そりゃそうだが、借り手がないっていつの間に、買う企業なんてよけいにあるわけじゃないか？」

安川は全然相手にしない。

「いや、企業じゃなく個人です」

「個人？」

「そうです。個人です。町の実力者である岩田さんです。あの土地の三分の一は岩田さんが持っているのですから、当然話に乗ってくれると思います。ましてあれだけのものを買えるのは岩田さんしかいませんし……」

細川は、山岡と考えた芝居を必死に演じている。

後釜の件が駄目な時には、売却の案を安川に賛成させようと二人で考えた策だった。売却は前後逆になるが、それは山岡が町を救うということで独断でやったことにするのだ。

「そんなに金があるのか？」

安川が山岡に聞いた。

山岡は耳を貸さず、ただ黙って目を瞑っている。

「ありますよ」

山岡ではなく、細川の口から出た。

安川は目を瞑っている山岡を見て、自分も目を瞑って腕組みをし

た。

「細川さん、今は非公式な会談ですが、真剣にそう思っているのですか？」

田畑が心配になり、細川に聞いて来た。

「もちろんです。このままの状態では町の存続が危ぶまれます。助役の私が一番分かっている立場です。一刻も猶予はないのです」

細川の真剣な眼差しに、田畑は唾を飲み込んだ。

「取り敢えず、いくら足りないのですか？」

田畑が聞いた。

「十億です」

細川がスパツと言った。

「でも十億じゃ安すぎでしょ」

「そりやそうです。あれだけの土地、少なくみても三十億。いや、もつとも知れませんが。でも、取り敢えず十億あれば町は大丈夫なのです。それ以上あればその金で商業圏を整備したらいいと思いますが……」

「なるほど」

細川の言葉に安川が頷いた。

「それは名案かも知れんな。後釜がなければ死に土地だしな。持つてても何も産まない。それより岩田さんが買ってくれば町の危機は乗り越えられるし、余れば商業圏をいじれる……。しかし、岩田さんにその気があるかどうかだ。それにそんな大金を持つてるだろうか？」

山岡は、安川のその言葉を聞いてニヤリとした。

「細川君」

山岡が突然目を開け、細川の手を取って臭い芝居をした。

「町の危機を一番知っている君のことだからこそその発言だな。実は私もかねがねそう思っており、岩田さんには後釜の問題が駄目の時には何とか買ってくれないかとお願いしていたのだ。君にはいつも苦勞をかけるな」

「そうでしたか」

細川がホッとした。芝居ではなく、安川が乗り気になってくれたので本気にホッとしたのである。

「で、その時にはいくらで？」

安川が聞いて来た。

「相場では五十億くらいはするでしょうが、町の土地であり、無理を言って買って貰うわけですから、半分の二十五億と言いたいのですけど、何とか三十億で相談してみましよう」

「後釜がなければ死に土地なんですから、上等じゃないですか。やりましよう」

安川はもろ手を挙げて賛成した。

山岡、細川の臭い芝居で話ほとんどん拍子に進み、すぐに議会にかけられ賛成多数で可決された。

山岡の頼みで、一週間の所有権移転登記の留保をお願いしていたことが実り、前後していた売買は正常な取り引きとなった。

これで山岡、細川は石渡の悪事に加担したが、自らその罪を滅ぼしたのである。そして、架空名義の三億円つつの預金が手元に残った。

7

三カ月が過ぎた。

栄光町は土地の売却資金で町の危機を救い、更に余剰資金で商業圏の整備に取り掛かっていった。

ようやく町に活気が戻り、山岡町長の下、安川たちも満足であった。

山岡、細川の大芝居で、罪人から町の救世主になった山岡は、町のだれもから認められていた。しかし、石渡のレジャーランド建設の話が未だに具体化されていないのが、山岡、細川の気になるところであった。

山岡は町の再建で飛び回り、岩田も石渡と一緒にアメリカへ行ったり来たりでゆつくりと話す機会が失われていた。

そんなある日、アメリカにいる岩田から、役場に電話があった。「町長、大変なことになった。今ニューヨークにいるんだが、例のレジャーランドが駄目になった」

最後の交渉で、岩田と相手との条件が折り合わず、この話は白紙になったと電話口で岩田に替わった石渡が伝えて来た。

「そうすると、あの土地は？」

山岡はそれだけ言うのが精一杯だった。

「当然、町に買い戻して貰うか、町に借りて貰うしかないですね」石渡は、自分が大丈夫だと言って岩田に買い取って貰ったのに、自分のことは棚に上げ、町はそうするのが当然だと言わんばかりに言ってきた。

「そんなことを今更言っても町には金がないのは知ってるでしょ」

「そんなことは分かっています。しかし、岩田さんのお陰で町は救われたでしょ？ それを忘れないでほしい。今度はその岩田さんが窮地に追い込まれたのですよ。町としては当然手を差し伸べるのが当たり前じゃないですか？」

石渡は強い口調で言った。

自分の失敗を、まさか町に持って来るとは思わなかったので、山岡は何と答えていいのやら分からなかった。

「とにかく明日帰るので、着いたら連絡する」

と言って、電話は切れた。

山岡の胸中は騒ぎ出した。

山岡は、その夜細川と金村を自宅に呼んだ。

「やはりな」

山岡から石渡の話を聞き終え、金村が言った。

「俺はこうなると思っていたよ。あの悪徳弁護士は最初からできやしない話を持って来たんだよ」

金村の言葉に、山岡も細川も驚きはしなかった。それよりも、せ

つかく握り締めた三億円の花がなくなるのと、このことが明るみに出ることを恐れていた。

「今回の件で奴の過去を調べてみたのだが」

金村が、独自に調べた結果を話した。

石渡の弁護士としての仕事ぶりや、付き合っている人物など、どれをとっても決して良い材料はなかったのだ。それに、アメリカのレジャーランド企業の日本進出の話などは、小指の先程の噂にも上っていないことを知った。

金村からそれらを聞いている内、山岡と細川は段々と顔色が変わって来た。

細川は何かを言い出したいのだが、目の前が真っ暗になり、ただ口をぱくぱくしているだけである。山岡も同じである。何から先に聞いた方がいいのか頭の中が混乱してしまつて、口元を痙攣させていた。

「あの弁護士は最初から駄目なものをさもできるように見せかけ、岩田さんを騙したのだ。そして、それを町につぐなわすためにあなたたちに三億円づつの金を渡したわけだ。三億円の花を内緒にするから何とかしろと……」

金村が、石渡の企みを暴露した。

「でも町に花がないことは知ってるはずだが」

山岡がようやく頭の整理ができたのか、口を開いた。

「町に買い戻してほしいとか、町が借りてくれとかわけの分からないことを言っている」

「そこが変です」

細川もようやく口を開いた。

「そこですよ。そんなことは百も承知で言っているのですよ……」

「

そう言つて金村は一呼吸おいた。そして、続けた。

「おそらく……、奴の狙いは別にあると思います。今回のことはその布石であつて、もつと何か大きいことを考えているのじゃない

いかと思うのですが」

「例えば？」

山岡が聞いた。

「町の危機を救ったのですから町には貸しがある。それにあなたたちには多額なお金を渡している。町としても町長としても、岩田さんのためならできる限りのことはしてくれらるうと見ていますよ。石渡が町長に話した買い戻しのことや、借りてのことなどどうでもよいことなんです。金がないので買い戻しはできないし、さんざん借りてをさがしてそれもないことは百も承知の上だからそう言うて来たのです」

金村は一拍おいて、座り直した。

「そこで、何か違うものを要求してくるに違いない。町所有の一等地だとか、町の特別な利権だとか。石渡の考えそうなことはそんなことだと思えますが……」

金村は、町に何か特別なものがあるかのように、山岡の顔を覗き込んだ。

「ご覧のように、こんな町に何もあるわけがない」

山岡は口を尖らせ怒ったように言った。細川も腕組みをして思案に暮れた。

「国や県からは何もないですか？ 施設を作るだとか、鉄道、高速道路など作る話は？」

「何もない。そんなことがあれば私よりも君の方が早いだろ」

県会議員である金村は、そりゃそうだと納得した。

「では何でしょうか？」

金村の問いに、二人は腕組みをしたまま黙ってしまった。

アメリカから帰って来た岩田と石渡は、すぐさま町役場にやって来た。

町長室では、山岡と細川が神妙な顔で待っていた。岩田はそんな二人の顔を見たが、素知らぬ顔をして椅子に腰掛けた。

「電話で話した通り、あの話は駄目になった」

岩田が座ったと同時に言った。

「そこでだ、町長」

代わって石渡が言った。

「元に戻したいのであの土地を同じ三十億で買い戻して貰いたい。それにあんたら二人に渡した三億も返してほしい。当然、私の貰った十四億の金は岩田さんに返してある。仕事が旨いかなかったのですから当たり前です」

石渡は自分の非を認めず、得意になって喋った。

「それはそうですけど、レジャーランドが出来るとは出来ないうことは関係ないことでしょう。そもそもは、石渡さんが大丈夫だからという事で岩田さんも我々も承知したこと。それを今になって駄目だから買い戻してくれと言っても、はいそうですかと言って簡単にできるものではありません」

山岡は、石渡に責任の所在を明らかにした。もともと岩田、山岡ラインに横から石渡が入って来て、岩田、石渡、山岡ラインになったことに、山岡としては面白くなかった。それがこのような言動になって口から出てしまったのである。

「町長。そんなことを言っているのですか？ 三十億の金で町を救ったのは岩田さんですよ。それにその裏金として三億づつあんたらに渡っているんですよ。それを安川や町の人たちが知ったらどうなります？ 大変なことになるでしょうね……」

石渡はフツツと含み笑いをした。

「金は返します。一銭も手をつけてないですから」

「当然でしょう。しかし、返したからといっていいもんじゃありません。事実、公文書を極秘に偽造し、町の土地を勝手に売ってしまったのですから。ただ、結果はうまく行き、町の人たちの認めることになったわけですけどね。でも、公文書偽造及び行使、そして三億

の裏金。これは事実ですからね」

石渡が、山岡と細川の顔を睨んだ。

「脅迫ですか？」

細川が口を開いた。

「とんでもない。ただ事実を言ったまでです」

石渡が山岡から目を逸らした。

「そりゃ、確かに私が蒔いた種です。うまく行くと思ってやったのですが、結果は失敗した……。そして岩田さんには大変な迷惑を掛けてしまった」

「それは分かります」

山岡が岩田の顔を見た。

岩田は、依然押し黙ったまま、真つすぐ前を向いている。

「いいですか。町にとつて恩人の岩田さんが困っているのですよ。六億の金を返して貰っただけで済むとはとてもない話です」

「じゃ、どうしたらいいのですか？ 町には三十億なんて金はないのですから。ご存じのように体育館に運動場、町役場、そして、商業圏の開発に全てつぎ込んでしまいましたから。今更三十億を返せと言われても、ないものはできません」

山岡が、石渡に強い口調で言った。

「まあまあ、町長」

岩田がやつと口を開いた。

「町長の言うことはよく分かる。しかしじゃ、わしもこの歳になつて三十億の借金はきついんじゃない。それこそ明日にでもパンクするかも知れん。そうなったらどうする？ 全て町長の責任だぞ」

岩田の言葉に、山岡は何も言えなかった。

「どうしたら……。いいのですか？」

山岡に替わつて、細川が恐る恐る聞いた。

「あの土地の北側に廃抗がありますね」

石渡が口を出して来た。

「えっ？ ええ」

細川は当惑した顔をした。

立入禁止とされ、とうに廃抗となった石炭鉱山がある。二十年前の地名ブームの時には栄光町の歴史の一つとしてもはやされたものの、三十年前に掘り尽くされた廃抗など今ではだれもがその存在を忘れている。

その鉱山は、現岩田所有の太平自動車の跡地の北側に隣接しており、そこからなだらかな丘になり、その中腹に廃抗の入口がある。そして、その先は山が連なり国有林になっている。

「その廃抗になっている山は、栄光町の所有地ですね」
「確かにそうだが」

山岡が口を出した。

「その山を譲ってもらいたい」
石渡がスパツと言った。

「廃抗を？ どうするんです？ とうに石炭は出ませんよ」

「いや、石炭などありません。我々はまだレジャーランドのことを諦めたわけじゃありません。そりゃ、あの土地を町が買い戻してくれるなら話は別ですが……」

石渡はそう言って、山岡と細川の顔を見た。

「それができない以上、あの土地を何とか生かせなければならぬのです。今回のレジャーランド建設は失敗に終わったが、今後また話が持ち上がるかも知れない。その時、あの丘も一緒にレジャー施設にすれば起伏にとんだ変わったものができるのじゃないかと思つて、岩田さんと考えたのです」

石渡の言うことを、山岡と細川は黙って聞いていた。

「とつくに廃抗になっているし、観光名所でもないし、町としても別になくてもいいでしょう」

「そりゃ何も使っていない土地だが、我々が勝手にいいとは言えないですよ」

細川が手を振って答えた。

「また偽造すればいいだろう。町の土地なんだから」

岩田が簡単に言った。

「岩田さん」

山岡がたまりかねて、岩田に言った。

「あの時は確かに偽造してやってしまったが、今度はそうはいきません。ただ、あの土地は何も使っていないし、町としても恩のある岩田さんの申し出ですから、この件は議会で可決できると思います」

山岡は、町長として自信のある言葉を言った。事実、山岡はホッとした。もっと無理難題を吹っかけて来るのではと思っていたのに、意外に簡単なことなので山岡は落ち着き払うことができた。

「臨時議会を設けるので、この件を正式文書として上げて下さい。」

安川さんにも事情を説明して、賛成して貰います」

「町長がそう言うのなら大丈夫だろ。何せわしは苦しんでおるんだ」

岩田が、苦しい顔を山岡に見せた。

岩田の要望は議会で難無く通り、旧石炭鉱山は岩田の所有になった。

早速、鉱山の一番高い所に背の高い建物が作られた。そして、太平自動車の跡地にはぐるりと囲いができ、大型トラックが頻繁に入りするようになった。

町には何の申請も出ていないので、山岡たちは工場の取り壊しをしているものと思っている。事実、工場の取り壊しのため、大型トラックが出入りしているわけだが、それとは別に特殊な材料が搬入されていた。

鉱山の高い建物は見張り塔であり、通信のためのアンテナが設置されていた。また、跡地にぐるりと回した囲いの内側には、特殊な塀が巡らされ、中央には巨大な滑走路を建設していた。

そんなこととはまったく知らず、山岡はのんびりと構えていた。

そんなところへ、県会議員の金村から連絡が入った。

「石渡について妙な噂が入ったのですが」

「妙な？」

山岡が問い返した。

「アメリカから、カジノの道具を輸入しているみたいです」

「カジノの道具を？ プレイランドに使うんじゃないのか」

「そんな簡単なものじゃないんです。ラスベガス級の賭博場を作るつもりです」

「あそこに賭博場を？ まさか。申請は出てないし、それに一体だれが許可するっていうんだ？」

「許可の事はともかくとして、事実アメリカからカジノ作りのプロが成田に到着しております。その人物が石渡と関係があるかどうかは定かではないですが」

「そうだろう。それだけでは何も分からんじゃないか」

「でも、かなりのスロットマシンやルーレットの機械がアメリカから出ているのです。これはアメリカに居る私の友人が目撃しています。その時、石渡や栄光町の単語が飛び交っていたと話しています」

「そりや何かの聞き違いだろう。ま、用心をするに越したことはないだろうが……。近いうち跡地に行つて様子を見て来るよ」

「そうして下さい。また何か情報が入りましたら連絡しますから」

金村はそう言つて電話を切った。

金村には強がり言つていた山岡だが、あれ以来岩田と連絡を取つていないので跡地がどうなっているのか、心配ではあった。

早速、山岡は細川を伴つて跡地に行つてみることにした。行く途中、金村の話は細川にしたが、一笑に付されてしまった。

跡地は、県道に長々と面していて、その全てに囲いがしてあった。そして、中ほどに一ヶ所だけ出入りできるようにゲートがあった。

山岡の車がそのゲートに近づくと、四人が車を囲んで何の用かと尋ねて来た。

「町長だが、中に入れてくれ」

「だめだ。町長だろうがだれだろうが、聞いてないものは通すわけにはいかない」

いかつい顔の一人が通る声で言った。

山岡は何だかんだと押し問答をしたが、結局は入れて貰えなかった。その間にも大型トラックが出たり入ったりしていた。中には巨大な物がけん引されて跡地に入って行った。

（金村の言うカジノの道具だろうか）

山岡は不安を募らせ、金村の言葉を思い出した。

「あれがルーレットやトランプの台だとしたら大変だぞ」

「そうだとすると、プレイランドの施設に決まっていますよ」

「しかし、まだ何の申請も出てないのだぞ。いくら岩田さんでも、やる前には出すだろう。弁護士もついていることだし。申請も出さずにやるとは思えん……」

山岡の言葉には、自信のなさが滲み出ていた。岩田にしる石渡にしる、山岡が自動車電話で掛けたところ、居留守を使われた感じがしていたのである。

「とにかく、明日正式に立入検査をしよう」

役所からの正式な立入検査なら拒否はしまいと、山岡は考えた。

しかし、翌日安川を含め八名で押し寄せたが、前日と同じく一歩も中に入れてくれなかった。

「役所からの正式立入検査だぞ！」

一人が怒鳴ったが、門番たちは素知らぬ顔をして、再度受け入れを拒否した。

「それじゃ勝手に入らせてもらうぞ！」

一人がつかつかとゲートに向かって歩いた。

それを見ていたのか、ゲート横の建物から岩田が出て来た。そして、皆に向かって言った。

「皆さん、申し訳ないことをした。さっ、どうぞ」

と、岩田が山岡たちに手を差し延べ、門番に目配せした。

鉄の重い扉が開き、山岡たちの乗った二台の車が入った。

車を降りた八名は、前と後ろに三名づつの人に守られ、岩田の後を着いて歩いた。

ゲート横の建物から中に入り、階段で地下に降りた。そのまま真っすぐ歩くと、更に重厚そうな扉が目の前に現れた。

岩田がその前に立つと、扉はリモコンになっているのか、自動にゆっくりと開いた。

「さあー、皆さんどうぞ」

岩田の手招きで全員中に入った。

そこは二十畳ほどの部屋で、中央に丸いテーブルがあり、会議室のようであった。

「その椅子にどうぞ」

岩田はそう言って全員を座らせ、自分は一段高いところに座り、皆の顔を眺めた。

「お偉いさんがいつぱい来て……。しかも、立入検査だど？」

岩田の顔は先程とは打って変わり険しくなり、町長に目を据え睨んだ。

「実は、妙な噂を聞いたもので……。」

山岡が申し訳なさそうに言った。

「妙な噂？ それはなんじゃ？」

「アメリカからカジノの道具を購入しているって、小耳に挟んだもので」

山岡の言葉に、岩田はただ黙って聞いていた。

「しかも、カジノのプロまで呼んでいるということを聞きました。

まさかとは思っているのですが、一応は実態調査をしなくてはと、そう思っただけなんです」

「こんなに大勢でか？」

「ええ。昨日来たら入れてもらえなかったんで、今日正式に書類を持って来ました」

山岡が、立入検査の令状を岩田に見せた。

「なるほど。役人として来たわけか……」

岩田はぶつぶつ言いながら、

「そんな噂話だけで、お偉いさんが八名も来たのか」

と、皮肉たつぷりな言い方をした。

「いや、その噂よりも、町に何の申請も出ていないのに廃抗の上には高い建物が建つし、跡地は囲いがなされ、大型トラックが頻繁に行き来しているので何か作っているのじゃないかと思ひまして・・・」

横から細川が口を出した。

「自分の土地をいじくるのに、一々町に言わなきゃならないのか？」

「ええ、建築物とか何か工作物を作るときは許可が必要です」

「わしでもか？」

岩田が、ギョロつと町長の顔を見た。

「ええ。そうなんです。石渡さんなら当然知ってるはずですよ」

山岡が、石渡の名を出した。

「岩田さん」

そこへ、たまりかねたように安川が口を出して来た。

「そんなことは当たり前のことです。申請の件は別としまして、レジャーランドのためにということで我々は賛成をしたのですが、現に廃抗の上の建物を見えますと、およそレジャーランドとは縁の遠い建物なので一体何に使うのか聞きたいのです」

安川の鋭い質問に、岩田の顔がムツとなり、

「お前なんかそんなことを言われる筋合いはない！　どんな建物で何に使おうと、お前には関係ない！」

岩田が強い口調で安川に言った。

「岩田さん、私はあなたの力になろうと思って町長に賛成したのですよ。いわば私も味方じゃないですか。腹を割って話して下さい」

安川が鋭い目で岩田を睨んだ。

「聞けば、町長にも何も話してないということじゃないですか。これは町を挙げての事業なんですよ。確かに岩田さんの所有地ではあるけれど、町が全面的にバックアップしなければ何もできないので

すよ」

安川の言葉に、岩田はムツとしたまま黙ってしまった。

「それではお話ししよう」

突然、安川の後ろから声がした。

山岡たちの座る後ろの扉から、石渡が出て来た。

「廃抗の上の建物は、今我々がいるこの建物とは空中で繋ぎ、ロープウェイにします。ただ、まだ開発中であの建物は実験的に建てただけのものです。回りの工事も仮にやっているだけで正式なものではありません。実験が終われば取り壊します。まだこういう建物を作るか検討中ですから、町にはまだ申請を出す段階ではないのです」

石渡は、もつともらしく説明した。

「でも、あんな大きな建物を、たとえ実験的に建てたといっても、町にはそれなりの申請をしてもらわないと困ります」

細川が、役人として言った。

「単なる張りぼてなので中は空洞です。およそ建築物というものではないので出さなかったのですが、それでは困るというのでしたら出しますけど……。しかし、今から出して許可が降りる頃には壊してしまいますけどね」

石渡は、口の端に含み笑いを残した。

「それは建築課の……」

細川の言いかけを、山岡が止めた。

「そんなことはどうでもいい。それより大型トラックが頻繁に出入りするし、回りを高い塀で囲って中がどうなっているのか皆目分かんなくしてあれば、意見を聞いたり中を見るのが当然である」

山岡が、町長として石渡に言った。

「大型トラックが頻繁に出入りしているのは、太平自動車の工場の残骸を運んだり、その跡を補修したりしているからです。その膨大なほこりを外に撒き散らさないように高い塀をしたのです」

石渡は、顔色一つ変えず、さらりと言った。

「ですから、あなた方に来てもらう筋合いは何もないのです」

この言葉に、山岡たちは何も言えなかった。

「分かったらお引き取り下さい。我々は今忙しいのです」

そう言って、石渡は岩田に目配せをし、出て行こうとした。

「ちよっと待って下さい」

安川が二人を止めた。

「もう一つ教えて下さい。レジャーランドのシミュレーションをやっているということは、レジャーランドの企業との話はうまく行っているのですね？」

「いや、まだです。ですからこのシミュレーションを元に、完成模型を作りいくつかの企業にモーションをかけるのです」

そう言って、岩田と石渡は部屋から出て行った。

10

山岡たち役場の代表八名は、石渡のガードに遭い跡地の様子を見ることができずに帰って来た。

そして、二週間が過ぎた。

その間、廃抗の上の建物がいつ壊されるか、山岡たちは常に注目を注いでいた。あの建物が壊されれば、レジャーランドの第一段階の実験が終了した証しだからである。

だが、金村の考えは、岩田のやっていることはレジャーランドの建設なんかではなく、賭博施設を作っていると、今も思っている。

事実、カジノ作りのプロが日本に来ていて、スロットマシンやルーレットの機械がアメリカから大量に出ている。ただ、それらがあの跡地へ来ているものなのか、その辺は皆目分かっていない。しかし、金村の情報源はそんないい加減なものではないし、石渡の不穏な動きを見ていると、一概に噂だけでは片付けられないものがある。

その石渡の動きを調査してから、怪しい事柄が再三出て来ている。

石渡が以前アメリカに行った時もラスベガスに寄り、カジノ作りのプロと会っている。その後も再三会っていることから、単なるレジャーランドではなく、一大賭博場を作ろうとしているのではないかと考えられる。

「今言った石渡弁護士の詳細な行動が、この報告書に載っています」

金村が、町長室で山岡に言った。

「それが事実で、あの跡地にカジノを作っても許可されなかったらどうするつもりなんだろう」

山岡が、半信半疑で金村の顔を見た。

「その時はアメリカの力を」

「まさか」

山岡が一笑した。

「こんな小さな町に国が出て来るわけがない。ましてアメリカが日本の法律を無視して。それこそ外交問題になってしまう」

山岡はそういつつも、不安な顔をした。

「いや、アメリカの軍隊のためにとか・・・」

「それはないだろ。でも、考えられるのはあの広大な土地を利用して、アメリカの軍隊の練習場として貸すことはできる。そのための施設として賭博場を。あの石渡のことだから、それくらいのことは考えるかも知れない」

「しかし、問題は残りますね」

「外交問題がな。でも、それ以前に町の問題が先だ」

山岡は、頭を叩きながら椅子から立ち上がった。

「あの時は、石渡にうまくかわされたが・・・、もう一度行ってみよう」

山岡が受話器を取り、岩田へ電話した。

しかし、何度も呼び出し音だけで、だれも出ない。

「いないのですか？」

金村が言いかけた時、内線が鳴った。

「山岡です」

山岡が内線のボタンを押して用件を聞くと、黙って点滅している外線のボタンを押した。

山岡は、受話器を持ったまま黙って相手の言うことを聞いている。聞いている内、だんだんと山岡の顔が青白くなって来た。そして、受話器を手から滑り落とした。

「町長、何か！」

金村がびっくりして聞いた。

「石渡からだ。あの施設はアメリカの支配下になったそうだ」

「えっ！」

山岡の言葉は弱々しかったが、耳を疑うような内容だった。

「テレビの臨時ニュースを見ると言ってる」

山岡は肩を落とし、テレビのスイッチを入れた。画面の下の方にテロップが流れていた。

『アメリカ軍専用のレジャー基地、栄光町にできる』

山岡が、他のチャンネルを回した。

アナウンサーが横からメモを貰いながら、軽快に喋っていた。

それによると、アメリカ軍の沖縄基地の縮小問題で、演習場及びレジャー施設を栄光町に作ることが決定したとマスコミ各社が報じた。

政府は、名乗りを挙げてくれた栄光町に感謝すると、喜びを表した。

大変なことになった。金村の考えていたことが現実となってしまうった。

そうこうしている間に、マスコミ各社が栄光町にぞくぞくとやって来た。

町長以下、栄光町の幹部全員が集められ、政府とホットラインを結んだ。

「いや、ありがとう。山岡町長の力ですな」
官房長官が喜んでいる。

「違っんです。あれは私共に関係なく……」

「いやいや、町民の手前そう言いたいのではありませんが、山岡さん、ありがとうございます」

官房長官は山岡の言うことを聞き入れようとしない。それどころか、よくやったと感謝の言葉を言った。

「遅かった」

山岡がボソリと言った。そして、床にひざまづいた。

「町長！」

金村が山岡の表情を掴み、がつくりと肩を落とした。

1
1

三カ月が過ぎ、太平自動車の跡地には立派な賭博施設ができ、滑走路もできた。

そして、沖縄から連日のように輸送機が飛び、大勢の軍人がやって来た。

栄光町の住人は飛行機の騒音に悩まされ、町はその保障問題で大いに揺れていた。なかなか結論の出ない苛立ちに、町を去って行く人が後を絶たなかった。

大勢の軍人が来ているのに、その施設からは一步も出ず、飛行機で来て飛行機で帰ってしまうのである。当然、町は衰退する一方であった。

山岡の後釜に座った安川も自ら町長の座を降り、町長の立候補を探した。しかし、だれも立つ者がなく、

「また、元の栄村と光崎村に分けるか」

と、自らに問いかけていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9582i/>

たそがれビレッジ

2010年10月8日15時25分発行